

# 100年前の共立女子職業学校の生徒について

## — 佐藤 蕙と残された刺繍作品から —

About the Student of Kyoritsu Women's Occupational Institute at 100 years ago  
- Fuji SATO and her Embroidery -

徳田 誠志

Masashi TOKUDA

### はじめに

共立女子大学は明治 19 (1886) 年に共立女子職業学校として設立され、まもなく 130 年を迎えようとしている。この間「女性の自立」という理念を掲げ、神田一ツ橋の地でわが国の女子教育を担ってきた。この場所は幕末に「蕃書調所」という、江戸幕府の教育・研究機関が設置されて以降、本組織が今日の東京大学に進展していくように、学問・教育の中心地であった。さらにその後もこの近くには、明治・専修大学等の前身となる教育機関が設立された。その結果、日本でも有数の大学街となり、大学とともに発展したことによって、世界にも例を見ない「神田古書街」が形成されて、今日に至っている。まさに明治以降における大学街の一角を、本学も占めてきたといえる。

さて小稿では、100 年ほど前にこの共立女子職業学校にわずかな足跡を残した一生徒の事跡と、その手による刺繍作品を見ていくこととしたい。そして大正時代における、本校の教育を垣間見ていこう。さらには、明治に生まれた人物を取り巻く状況を見ながら、日本が近世から近代へと移り変わっていく様子をたどっていくものである。

### 1. 佐藤蕙とその出身地

— 岐阜県養老郡養老町栗笠 —

佐藤 蕙 (さとうふじ) は、明治 37 (1904) 年 1 月 2 日に誕生した。この年は日露戦争が勃発した年として記録されているが、明治維新後の日本においては、この 30 数年の間に大日本帝国憲法が公布され、あるいは不平等条約が解消され、一等国への階段を一気に駆け上ろうとする時期であるともいえる。そしてまたわが国にとっては、常に戦争の影がつきまとう苦難の 20 世紀前半という時代の幕開けであるともいえよう。もちろん生まれたばかりの蕙にとっては、そのようなことを知るまでもなかった。

さて、蕙の父親は稀造 (きぞう)、母は綱 (つ



写真 1 佐藤 蕙姉 手前右端が蕙 (明治 40 年頃撮影)

な)といい、菟は7人兄弟の末っ子であった。すなわち菟は稀造が50歳を過ぎてから授かった子であり、両親、兄妹からさぞかわいがられたであろう様子が、明治40年頃に撮された写真から窺うことができる(写真1)。しかし菟にとっての最初の悲しい出来事は、稀造が明治39年11月に他界したことである。菟にとっては物心が付く前であったと思われ、父親の愛情を知ることなく成長した。とはいえ年の離れた長兄・次兄・姉とともに、まだ裕福であった実家であって、それほど不自由することなく幼少期を過ごしたと思われる。

続いて、菟の出身地について記述を進めていこう。生家は、現在の岐阜県養老郡養老町栗笠にあった。養老といえば孝行息子の伝説を残し、奈良時代の元号にもなった「養老の滝」が全国的に名高いが、栗笠の地は掛斐川と牧田川・杭瀬川の合流地点に近い平野部にある。後述するようにこの栗笠は、「栗笠湊(くりがさみなと)」とよばれた河川交通の要所であり、佐藤家の家業もこの河川交通を江戸時代以来管理、監督するものであった。今ではその面影を示すものはまったくないが、江戸時代には「濃州三湊」の一つとして大いに賑わった場所である。

この河川交通とその興亡については後述することとして、佐藤家の氏神であった「福地神社」と、その祭礼について述べていきたい。福地神社の祭神は大国主命とするが、ご神体は明治の

神仏分離政策によって、阿弥陀如来から御神鏡に変更している。創設年代は、その記録を水害・火災によって失っているため明らかではないが、江戸時代の享保年間(1716・1734)には現在の地に鎮座していたことが知られている。

この神社の祭礼はかつては10月5日に定められていたが、現在では10月の第1週の土・日曜日に執り行われている。祭礼にあたっては太鼓やぐらが組まれ、大提灯・切子灯籠が境内を覆い尽くさんばかりに掲げられる。さらに神社の入口には紅燈籠や大のぼりが建ち、栗笠集落のすべてが祭り一色に彩られる(写真2)。

この祭礼時に奉納される獅子舞は、昭和45(1970)年に岐阜県の重要無形文化財に指定されている。そしてこの獅子舞の起源については、佐藤家の先祖であり徳川家康の家臣であった「佐藤文三郎親定」という人物が奉納させたものであると伝わる。しかし「親定」なる人物は、家系図によると幕末頃の分家筋に認められるものの、徳川家康との関係は見いだせない。それゆえこの獅子舞については、江戸年間の文化・文政頃に始まり、栗笠湊の繁栄と共に盛んになったと考えられている<sup>1)</sup>。

この福地神社に奉納される獅子舞は、48の舞から構成される。現在ではそのすべてを舞うことはないようであるが、伊勢神楽の流れを汲むものであり、軽業的なものが多い。さらにはそれぞれの舞には、伊勢・尾張諸地域の要素が取り込まれており、このことから栗笠の地には河川交通を通じて様々な情報が入ってきたこ



写真2 福地神社例大祭(平成24年10月7日撮影)



写真3 福地神社奉納獅子舞(岐阜県重要無形文化財)

とを知ることができる(写真3)。

この祭礼や獅子舞を、菫が見聞したという直接の証拠は残っていない。しかし佐藤家の氏神様において、先祖が五穀豊穡、村内安全を祈願して奉納した祭りである以上、目を輝かして見ている姿を想像することは可能であろう。そしてまた、この祭りは栗笠湊の繁栄を今に伝える、唯一の証拠でもある。

## 2. 共立女子職業学校への進学と刺繍作品

このように佐藤菫は、幼少時に父親と生死を分かちつものの、江戸時代以来のにぎやかさがまだ残っていた栗笠の地で成長していった。生家も安泰であり、兄妹に囲まれた生活は、岐阜の田舎町であったとはいえ、交通の要所であったことから様々な情報ももたらされたであろうし、それなりに充実したものであったと思われる。

そして、菫の残したアルバムには「東京共立を受験にいく時大垣にて写す 13歳」と記載された写真が、一葉添付されている(写真4)。菫は明治37年(1904)の生まれであるので、数えの年齢が記されているとしたら、尋常小学校の課程を終えた大正5(1916)年ということになる。袴を身につけ、唇をぎゅっと結んでいる表情はこれから上京し、受験に臨むという



写真4 佐藤菫 13歳(大正5年頃撮影)

緊張感が伝わってくる。また、右手に洋傘を持っている姿は、写真用の小道具であるかもしれないが、大正期のモダンな姿を今日に伝えてくれる。

この受験がどのようなものであったかは不明であるが、無事合格したようであり、めでたく共立女子職業学校に入学することとなった。この大正時代前半の学校生活の様子を、『共立女子学園百年史』から見ていこう<sup>2)</sup>。

この時期のわが国の状況は、大正3(1914)年に第1次世界大戦がヨーロッパ大陸を主戦場として開戦し、日本軍もドイツ帝国が権益を保持していた中国大陸山東省青島へ派兵している。国内においては大戦の直接的な影響はなかったものの、共立女子職業学校では職員生徒が協力して慰問袋を陸海軍に献納したことが記録に残されている。翌年には、昭憲皇太后の崩御により延期されていた大正天皇即位の礼が執行され、名実共に大正時代がスタートした。共立においては大正5(1916)年に、手島精一が校長を退任し、宮川保全があとを継いだ。そして鳩山春子が校長補となり、のち大正11(1922)年に校長となっている。このように明治19(1886)年に創設されて以来30年を過ぎ、創設に関わった第1次世代が引退し、第2世代となる鳩山らが先頭に立って学校を牽引する時代が到来したといえよう。さらには学校用地の拡張や、寄宿舎の設置など学校としての体制が確固たるものとなった時期でもある。

この時期の共立女子職業学校に学んだ生徒の手記が『百年史』に掲載されているので、その一部を引用しておく<sup>3)</sup>。手記を残した人物は、鈴木きゐ(旧姓松下き江)であり、明治31(1898)年の生まれである。よって菫より5歳ほど年上となるが、過ごした学校生活はほぼ同じようなものであったと考えられる。その手記によれば主に学んだ科目は裁縫と刺繍であるが、その合間には算術・国語・書き方など、通常の女学校で教授されていたものと同様の科目も履修したようである。そして生徒の様子としては、「髪



写真 5 佐藤 共立女子職業学校 2 年生  
(大正 7 年頃撮影)



写真 7 佐藤 刺繡裏面  
(「共立甲部本科佐藤蓮」)

は東髪に結び、縞、緋の着物に紫紺の袴、下駄履きで通学し、(中略)お友達も遠く山口県、福岡県、三重県などから来られており、皆様本当に一生懸命勉強されました。」と記している。

この頃の蓮の様子を伝える写真が、1枚残されている(写真5)。この写真の横には「共立二年生」と書かれたメモが貼り付けられており、下宿先となっていた姉(柏淵簾子)の子供(蓮の甥)と一緒に写っている。この姿は、まさに手記に記されているとおりの着物、袴姿であり、1年前の上京時の写真よりは、少しだけ大人び

た表情に見える。また手記のとおり、全国各地から生徒が集まっており、蓮のような立場の生徒が結構在学していたことも窺える。蓮は寄宿舎には入らず、姉の嫁ぎ先の下宿していたようである。この下宿先がどこにあったかは不明であるが、手記にあるように下駄履きで通学していたのであろうか。

さて、この時期に蓮の残した刺繡作品があるので、それを見ていくこととしたい(写真6)。刺繡は縦41.5cm、横32.5cmの厚紙に、竹と雀が表現されている。この刺繡については、その鑑定結果を後述するが、まず裏面に記された文字に注目したい。写真に示したように(写真7)、刺繡用紙の裏面左隅に「共立 甲部本科 佐藤蓮」と記されている。



写真 6 佐藤 刺繡 (「竹と雀」)

実は、この記述のみが佐藤蓮が、共立に在学したことを示す唯一の証である。それは先述した写真に付された「共立に受験に行く際」「共立二年生」云々という記述は、この写真が写された時に記されたものではなく、蓮の手元にあった写真を後日アルバムに整理した際に、同時に書き入れたようである。それは、すべて同じ筆記具が用いられており、字体も同じであることを根拠とする。すなわちこのメモは蓮の記憶に基づいているものであり、これを裏付ける資

料には欠けていると言わざるを得ない。

その一方、刺繍用紙の裏に書かれた字体は写真の横に添付されたメモの字体とは異なっており、風化具合から判断しても後世に記したのではなく、まさにこの刺繍作品を制作した時点で菫が記載したものと判断した。もう1点付け加えるならば「甲部本科」という表記は、この時代に在学していた生徒しかなしえないと考えている。すなわち、『百年史』によれば、大正時代に入ってそれまでの「甲科」「乙科」という表記から、「甲部」「乙部」に名称変更したとある。そして「本科」とあるのは、この頃の学則改正によって設けられた「専攻科」や、大正7(1918)年に設置された「割烹速成科」「洗濯染色科」等との違いを示すために、それまでの「受験科」と称していたものを「本科」と呼称したと思われる。このような事実を勘案し、「共立 甲部本科 佐藤菫」という文字は、菫が在学時に自らの手で、自分の制作した刺繍の裏に筆記したものであると判断した。

なぜこの点に拘泥するかといえば、菫は後述するとおり中途退学したようであり、現在の共立女子学園の卒業生名簿には掲載されていない。仮に入学者名簿というものがあれば在学を確認できるのかもしれないが、入学者を記録した文書は残されていないようであり、菫が在学したことを公に証明する資料は存在していない

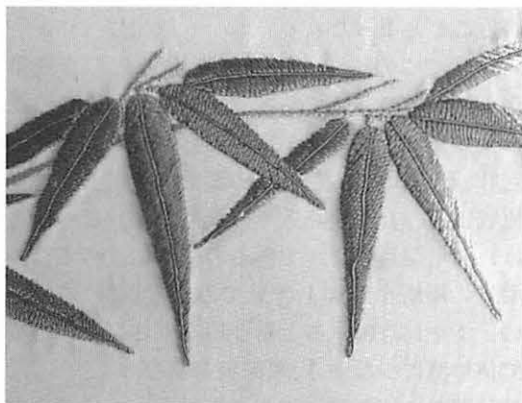


写真8 刺繍細部 その1 (「竹葉」)



写真9 刺繍細部 その2 (「雀」)

(註1)。それゆえこの刺繍作品と、その裏に記述された文字の信憑性が唯一、菫と共立を結びつける接点ということになる。現時点では、菫が共立に在学していたことを示す物証としては、この刺繍作品とその裏に記された9文字であるが、今後とも史資料の探索は続けていきたいと考えている。

続いて、残された刺繍作品についてみていきたい(註2)。題材は3本の竹と1羽の雀であり、モチーフとしては伝統的なものであるといえる。竹は3本描かれており、「細く短い竹(葉あり)」・「太く長い竹(葉あり・斑入りあり)」・「太く長い竹(葉なし)」という構成からなる。幹と枝については、緑もしくは黄緑色の撚糸を用い、平繡によって描く。葉と斑については、緑もしくは薄黄色の撚糸によって、斜繡とする(写真8)。

雀については、灰・茶・こげ茶・黒・白の各色を用いる。刺繍の技法は、頭・頬・胴体から翼にかけての部分、刺し繡で仕上げ、胴体から翼の縁取りはこげ茶色の平糸による纏い繡である。羽の全体は、薄こげ茶色の平糸による斜繡とする(写真9)。くちばし・目・目の縁などの細部については、くちばしが割繡、目が平繡、目の縁が駒繡という技法を用いて仕上げている。以上のように竹、雀の面表現には平繡・斜繡・割繡・刺し繡を用い、線の表現には駒繡・纏い繡等を用いている。

この刺繍作品が作られた経緯については、よく分からない。先の『百年史』に掲載された手記によると「二年生の時の制作は額三枚に鶴亀の袱紗だけでした」とあることから、「額三枚」のうち一枚にあたるものかもしれない。二年生とすれば 14 歳程度であり、今の中学二年生ということになるが、作品の出来映えについての判断は読者諸氏にお任せしたい。

### 3. 佐藤家の歴史と栗笠湊の栄枯盛衰

先述したように佐藤蓮の生家は岐阜県養老町にあり、「濃州三湊」の一つであって、その中で最も賑わった「栗笠湊」に位置した。本節では佐藤家の家系図をたどりながら、地方における一家族の近世から近代への変遷を見ていきたい。

佐藤家には一卷の家系図が残されており、その冒頭「佐藤家系小引」と題された序文が記されている(写真 10)。その文末には、記述した人物名として「君山松平秀雲」とある。この人物は尾張藩の藩士であり、儒学者として後述する『濃州徇行記』の編纂にも関わっている。生年は元禄 10 (1697) 年であり、天明 3 (1783) 年に没している。序文を書いた時期は「自分はすでに老年に達している」とあることから晩年のことであり、1780 年前後と想定される。この時の佐藤家当主は「光敬」であることが序文に記されており、この人物は、天明 5 (1785) 年に『志津之郷大墳ノ郷及佐藤氏ノ畧記』という短文を残している。このことから今日に伝

わる佐藤家系図の原本は、18 世紀の末に作られたと考えられる。現在筆者の手元にあるものは、この原本を書写したものであろうと考えられ、最後の記述は蓮(系図には「蓮子」と表記)が、昭和 8 (1933) 年に早野宗太郎へ入籍したことを記している。恐らくは、蓮が嫁ぐ際に新しく書写し、最後に一文を追記して持参したものであろう。

さて、この系図によれば、佐藤家は奥州藤原氏を先祖とし、さらには藤原鎌足につながる系図が記されている。もっともこれは各地の「佐藤氏」が藤原氏を祖とする一例に過ぎず、その信憑性は不明と言わざるを得ない。よって具体的な記述を残す最初の人物は、鎌足から数えて 32 代目となる佐藤将監親義と名乗る人物である。この人物が栗笠村に最初に居住し、天正 14 (1586) 年に亡くなったと記されている(註 3)。そして次代親成の時、佐藤家の歴史を語る上で最も重視された事実が、次のように記されている。それは元亀元年 (1570) 年に織田信長が朝倉義景と戦った際、浅井長政の裏切りにより窮地に陥ったいわゆる「金ヶ崎の戦い」において、信長の支援に出陣していた徳川家康も漸く脱したとされる。この時朽木谷を経て、美濃へ退却してきた家康を佐藤家に迎え、さらに船を出してその脱出を援護したとある。佐藤家はこの逸話を誉れとし、戦国時代末期から栗笠に定住し、名字帯刀を許された土豪として根を張ることとなった。

そしてこの佐藤家の繁栄をもたらした家業が、栗笠湊の間屋であった。先述したようにこの栗笠湊は、船附湊・烏江湊とともに濃州三湊と呼ばれている。これらの湊は揖斐川とその支流牧田川の合流地点近くに位置する。この湊とは、河川交通の要所であるのだが、改めてこの栗笠の場所を地図上で見てみよう(図 1)。この三湊を起点に見ると揖斐川を下ることによって伊勢湾につながり、東海道と結びつく。一方、琵琶湖畔の朝妻湊(現在の米原市)へは、その距離から名称がつけられた「九里半街道」によ

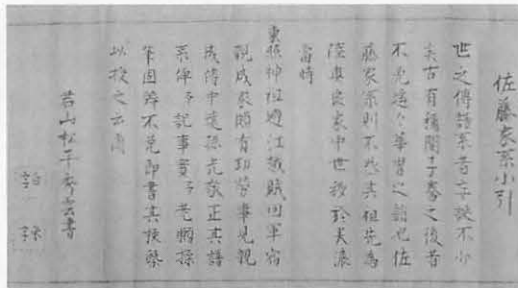


写真 10 佐藤家系図序文「松平君山」記

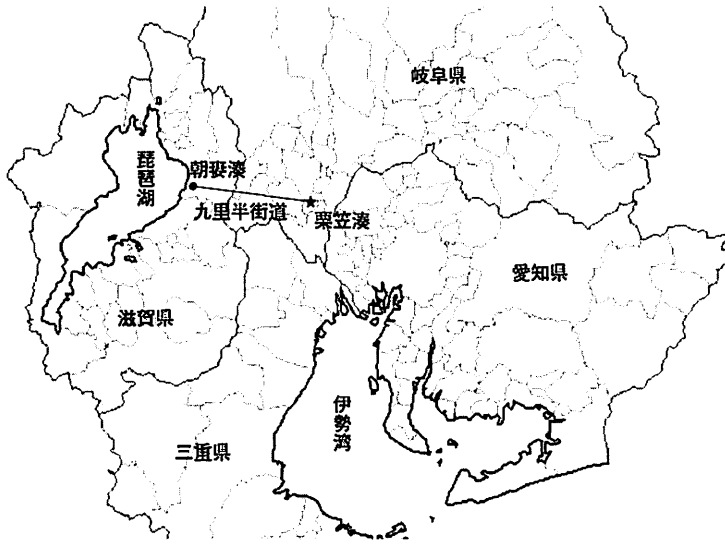


図1 「栗笠湊」位置図

って結ばれている<sup>4)</sup>。この朝妻湊は、琵琶湖の舟運によって京・大坂への物流拠点となっている(註4)。さらには北国街道(近江)の起点として北陸方面への分岐点でもあり、このルートによって日本海側と太平洋側を最短距離で結ぶこととなる。この河川・湖上の水運を利用した物流が盛んになる時期は近世初頭であって、まさに佐藤家がこの栗笠を本拠とした時期と一致している。この物流ルートによって、東日本から京・大坂へは木曾材・茶・陶磁器がもたらされ、一方、西からは油・炭・生綿が下り荷物として江戸へ運ばれた<sup>5)</sup>。

このように近世初頭にあって、物流は内陸の水運を利用することがもっとも安全かつ安価であったことから、東日本と西日本、あるいは日本海側と太平洋側、さらには東海道と東山道を結ぶ交通及び物流の要所として、この三湊は大いに栄えることとなった。その中でも栗笠湊が最も繁栄し、この湊の間屋として差配していた一族が佐藤家である。この佐藤家も本家の次郎左衛門が湊問屋を務め、他にも代々三郎や文四郎を名乗る分家が存在したようであるが、一族によって政治・経済・交通を取り仕切っていたことが知られている。その一端を示す史料と

しては、尾張藩士であった樋口好古が1800年頃に記述した『濃州徇行記』である<sup>6)</sup>。この書物はこの時期の尾張藩の地誌といってもよいが、その中にも湊の繁栄状況として「村にぎはしく豊穡の地なり」と記されている。そして栗笠にある専了寺には、文化12(1815)年に描かれた栗笠村の絵図が残されている。この絵図には村の中央に幅4間(約7m)の道路があり、その北側に佐藤家一族の屋敷が軒を連ねている状況が描かれている。

栗笠湊は江戸期を通じて物流拠点として繁栄し、さらには享保年間(18世紀前半)からは「六斎市」として月に6回の市が開催され、商業も盛んになっていったことが知られている。また、前節で見たように福地神社に奉納された獅子舞のような文化や情報も、様々な物資とともに集まってきたものと思われる。

このように江戸時代、200年以上にわたって尾張藩の庇護のもと繁栄した栗笠湊であるが、幕末になって急速に衰退していく。その理由としては、物流が内陸輸送ではなく、大型船によって直接上方から江戸へ運ぶ航路が確立したこと、さらには牧田川の川底に土砂が堆積したことによって船の運航に支障をきたし、その浚渫

費用がかさんだことが指摘されている。さらには西濃地域の中心地である大垣城下の「船町湊」に、物流の拠点が移ったことがあげられる。また、明治維新とともに尾張藩は消滅し、その庇護もなくなったことが最後の一撃として、この栗笠湊の衰退を決定づけたといえよう。

この湊の衰退は、佐藤家にも大きな打撃であったことは間違いなく、家業の衰退はまさに家の存亡に関わるものであった。明治維新を迎えた際の当主は、蓮の祖父にあたる光昌であるが、彼は明治 13 (1880) 年に死去している。その後を、蓮の父稀造が引き継ぐことになり、彼は明治の初めに渡米し、東京への進出も図ったようであるが、湊問屋に変わる家業を興すことができず、明治 39 (1906) 年に死去する。彼の子女達、すなわち蓮の姉は僧籍に入ったもの、軍隊を志したもの、早世したものなどさまざまであり、佐藤家を継ぎ再興を図る人物はついにいなかった。今日栗笠の地には、佐藤家の血筋を引く人物はまったく居住していない。さらには「佐藤」を名のる家はすでになく、本家・分家ともにすべて離散してしまっている。

現在、養老の地に唯一残る佐藤家の痕跡は、栗笠にほど近い場所に位置する莊福寺の墓地にある代々の墓石のみである (写真 11)。この莊福寺は家康を助けた親成の孫にあたる親重が明



写真 11 佐藤家墓地 (養老町 莊福寺)

暦 2 (1656) 年に葬られたことから、佐藤家の菩提寺となった。この莊福寺自体が現在無住のため、佐藤家の過去帳の有無などを確かめることはできない。現在残されている墓碑銘を見る限り、稀造の父母にあたる墓石が、やや荒れた墓地の一角に確認できたのみである。

#### おわりに

小稿では大正の初め頃、共立女子職業学校在学し、刺繍作品を残した佐藤蓮について、その生家と家業であった栗笠湊の盛衰を見てきた。最後にまとめとして、蓮のその後を記しておきたい。

蓮は共立女子職業学校の 2 年生までは学校に痕跡を残しているが、その後卒業生名簿には名前が記載されていないことから、この学年をもって中退したと伝えられている。中退の理由は詳らかではないが、下宿先となっていた姉(簾子)の夫(柏測東(とう)あるいは刀と表記)が、スペイン風邪によって死去したために下宿先を失ったことがその理由であるという。たしかに大正 7 (1918) 年から 8 年にかけて、通称スペイン風邪と呼ばれるインフルエンザが世界的に大流行し、わが国においても 39 万人とも 48 万人ともいわれる死者を出している。時間的な経緯としては蓮が 2 年生から 3 年生にかけての時期であり、義兄の死が中退のきっかけになった可能性はあろう。いずれにせよ卒業生名簿に名前が載っていないことから中退したことは間違いなく、蓮の短い学生生活は思わぬ終焉を迎えることとなった。

この直後の蓮の行動はよく分からないが、地元に戻り働きながら母と暮らしていたようである。そしてその母を看取ったあと、系図にあるように昭和 8 (1933) 年に、早野宗太郎の後妻として嫁ぎ、姓は早野となった。その後 1 男 1 女をもうけ、先妻の子を併せて 2 男 2 女の養育にあっていた。ところが宗太郎は、昭和 16 (1941) 年に死去する。日中戦争に突入していた時期であり、さらには第 2 次世界大戦後



の混乱期をどうにかやり過ごしながら、育児とその教育に明け暮れたことであろう。

波乱に満ちた半生を過ごしてきた蓮であるが、昭和30年代以降は世の中の高度経済成長期とともに安定した生活を過ごすこととなった。最晩年にはひ孫にも恵まれ、元号が平成となった年に天寿を全うした。85歳であった。晩年になっても、学生時代に身につけた刺繍や水引を半ば趣味として、手を動かし続けていた。そして、鳩山春子先生、あるいは薫子先生のことを口にしていたという。わずか2年足らずの学校生活であったが、その日々は青春時代の思い出として貴重な時間であり、人間形成に大きな影響を与えたことは間違いない。

改めて蓮の人生を振り返ると、2歳で実父と生死を分かち、義兄の死によって学生生活が中断し、母を看取ったために晩婚となった後妻の身も10年足らずで寡婦となるという、今から見れば過酷な生涯のようにも思える。もちろん当時の平均寿命を考えれば父も夫もことさら短命というわけではないが、現在の長寿大国日本においては考えられないような時代ともいえる。

蓮の人生は、ほぼ20世紀と重なっており、明治から平成までを生き抜いた共立女子職業学校に学んだ一生徒の生涯を通して、近代日本の変遷を見通してきた。

#### 追記

最後に、佐藤蓮と筆者の関係の明らかにしておきたい。この佐藤蓮は、筆者から見ると母方の祖母にあたる人物である。まもなく27回忌を迎えようという時に、ましてや100年も前に作った刺繍作品を再び母校の先生の前に披瀝することなど夢にも思っていないであろう。赤面することは間違いないのであるが、孫のしでかしたこととして、了承願うこととしよう。

筆者は平成9年以来、本学家政学部の非常勤講師を務めてきたが、祖母が共立女子学園に一時在籍していたという話は聞いていた。その

ため卒業生名簿を閲覧したものの、祖母の名前は見つけることができず、半信半疑のままであった。ところが昨年、蓮の実子にあたる筆者の母が自らの「断捨離」を兼ねて蓮の遺品を整理しており、その結果、刺繍作品と系図の存在を知るところとなった。蓮の子供、すなわち母を含めた2男2女は健在であるが、徐々に記憶が薄れてきていることはやむを得ない。この残された刺繍資料をもとに本学の教育を振り返ることと、そして今は存在しない「佐藤家」のファミリーヒストリーを今のうちにまとめたいと思い、この一文を草することとした。創立130年を迎える共立学園関係者の皆様に、拙稿をご高覧頂くことに感謝し、擲筆したい。

#### 【註】

註1 佐藤蓮についての在学に関する書類の有無については、共立女子大学図書館及び、共立女子短期大学社会心理学研究室助手赤羽光氏にご高配賜った。記して感謝申しあげる次第である。

註2 佐藤蓮の刺繍作品については共立女子大学大学院家政学研究科修士生である野尻久美子氏（現在、株式会社松鶴堂勤務）より、ご教示賜った。記して感謝申しあげる次第である。

註3 佐藤家がこの「佐藤将監親義」を初代として意識していたことの証左として、「光敬」が書き残した『志津之郷大墳ノ郷及佐藤氏ノ畧記』に、「親義」の二百年遠忌に善教寺に供養塔を建立したことが記されている。この石碑は、現在も海津市南濃町志津にある善教寺境内に現存している（写真A）。石碑の正面には「覺林院殿雲庵宗閑大居士」という親義の戒名が刻まれており、右側面には「天正十四年丙戌秋八月晦日」という親義の没年が記してある。天正14(1586)年は、光敬が『畧記』を記した天明5(1785)年からちょうど200年前であり、この石

碑が光敬が建立したものに間違いないと判断できる。

そして「親義」の三百五十年遠忌にあたる昭和 10 (1935) 年には、佐藤家一族が石碑の前で撮影した写真が菴のアルバムに残されている (写真 B)。この写真には菴の長兄・次兄とともに、善教寺の先代住職の顔を認めることができる。すなわちこの時点までは、佐藤家はどうにか命脈を保っているといえる。しかしながらこの後、第 2 次世界大戦とその



写真 A 佐藤親義 供養塔現状(海津市 善教寺)



写真 B 佐藤親義 350 年遠忌記念写真  
(昭和 10 年 8 月 25 日撮影)

後の混乱期を経て、さらには長兄が昭和 20 年代に死亡するに至って佐藤家は完全に衰退し、この石碑についても忘却されたものと考えられる。

本石碑の実見には、海津市教育委員会 日置智氏、ならびに善教寺にご高配賜った。記して感謝申しあげる次第である。

註 4 琵琶湖の舟運については、下記文献に詳しい。

太田浩司「琵琶湖の湖上交通—古代から近世までの舟運史—」『琵琶湖の船が結ぶ絆—丸木舟・丸子船から「うみのこ」まで—』滋賀県立安土城考古博物館  
平成 24 年 7 月 14 日

#### 【文献】

- 1) 『栗笠の獅子舞』養老町教育委員会 昭和 57 年 3 月
- 2) 『共立女子学園百年史』学校法人共立女子学園 昭和 61 年 10 月
- 3) 「第六節 大正初期の学生生活職業学校甲科生の学生生活」『共立女子学園百年史』学校法人共立女子学園 昭和 61 年 10 月
- 4) 『養老町の古道』養老町教育委員会 平成 7 年 3 月
- 5) 「三 交通 栗笠湊と問屋佐藤家」『養老町史通史編』上巻 昭和 53 年 3 月
- 6) 『濃州徇行記』(復刻版)樋口好古著・平塚正雄編 大衆書房 昭和 45 年 3 月